りびんぐらいぶず　令和2（2020）年6月第3号

お領解文の現代版トライアル

◆浄土真宗の救いのよろこび

一、阿弥陀如来の本願は
かならず救うまかせよと
南無阿弥陀仏のみ名となり
たえず私によびかけます

二、このよび声を聞きひらき
如来の救いにまかすとき
永遠に消えない灯火が
私の心にともります

三、如来の大悲に生かされて
御恩報謝のよろこびに
南無阿弥陀仏を称えつつ
真実のみちを歩みます。

四、この世の縁の尽きるとき、
如来の浄土に生れては
さとりの智慧をいただいて
あらゆるいのちを救います

五、宗祖親鸞聖人が
如来の真実を示された
浄土真宗のみ教えを
共によろこび広めます

（Ref）『拝読　浄土真宗のみ教え』編集委員会編　　本願寺出版社　2010年10月15日第七刷発行

◆はじめに……経緯……

「**浄土真宗の救いのよろこび**」は、『**領解文**』の伝統を受け継いで、お救いの構造を確かめつつ自ら口上する文章で、去る二００五（平成十七）年、教学伝道研究所で制定されました。

ところが、例えば、誰もが体験するお通夜のお取り次ぎで一文のお心をお伝えしようとしてその扱い難さに閉口するのは愚住ばかりではありますまい。

それは、一文が、本願寺第三代覚如上人によって開発されたご常教の**信因称報説**に則して構成されているからです。

実は、「信心正因」自体が信心獲得を具体的に示した御言葉ではありません。

また、現代人には、文法的な構成に無理を残したのでは致し方がありますまい。「阿弥陀如来の本願は」と切り出すのなら、その対応で閉じるべきでありましょう。

また、願文上は、「御名が成就された」という御言葉があるわけではありません。第十七願が諸仏称名の願と標挙されたことをもとにした解釈学に基づくものと窺われます。

ですから、「阿弥陀如来の本願は、南無阿弥陀佛の御名となり」は、「文によらず義による」とした空華独特の立場からも説明不足の問題を残してしまいます。

ここはオーソドックスには、ご本願は既に十劫の昔に成就されているのですから、まずはそのように表現すべきでありましょう。

そうすると「弥陀の本願成就して」という程の表現で文法上の無理を解決しておくのが無難ということになるのであります。

又「必ず救うまかせよと」とは、「どのようにしてお救い下さるのかの具体性」を欠いています。同じ事が「南無阿弥陀佛の御名となり　たえず私に呼び掛けます」にも云えます。

名号大行そのものは、法性法身の働きに則ることになり、もともとどのようにして働き出して下さるのかを表現できないのですから、現代人にこれを押しつけるのではなく、方便法身の働きにより体験的理解が深まるようにご案内すべきかと窺います。

お聖教ではないのですから、衆生が無理なく信心獲得プロセスに親しめることが大事だと発想を転換し、具体的には、連続研修会あたりで自分事として話し合って戴き、成果として残すのが良いのではないでしょうか。

では、具体的にどんな可能性がありましょうか。お粗末な試みをお示し致しますと

一、弥陀の本願成就して

南無阿弥陀仏のみ名となり

称えせしめて聞かしめて

われをタノメと喚び給う

お念仏（略讃）は、諸仏に習い、七高僧に導かれ、他力の念佛者(妙好人)に習い、終には、今生の別れとなったわが父母（ちちはは）のご縁で頂戴するようになったものであります。

「南無阿弥陀佛の御名となり」は、御常教で大事になさってこられた御文ですから、敢えてこれを削除するには及びますまい。

寧ろ大切なのは、お念仏することがそのままお名号をお称え申す大行(本願力回向された称名正定業)であり、称えれば衆生の上に働き出して下さる如来直々のお喚び声だったので

すから、「称名即讃仰、称名即聞名」と頂戴することが出来たのだと慶ばせて戴きましょう。

蓋し、親鸞聖人がお示し下さった六字釈の「**本願招喚の勅命**」こそは、浄土真宗の救いのエンジンに当る大切のおみのりです。

それ故、如来様のお喚び声に遇わせて戴けるようにご案内することが大事になります。

第一聯は、諸仏如来に讃嘆されたお名号を聞信する「聞其名号」のお心を本願招喚の勅命の側面から頂戴するのです。

浄土真宗の救いは、「本願の名号の聞信」にあります。それゆえ、その原体験ができるかどうかが私達が浄土真宗の救いに与りうるかどうかの分かれ目になるのであります。

◆勅命の他に領解（りょうげ）なし

第一聯のお心を再応するには、「お名号を聞く」お謂れに立ち入る必要があります。

一、弥陀の本願成就して
南無阿弥陀仏のみ名となり
称えせしめて聞かしめて
われをタノメと喚び給う

阿弥陀如来は、自らが南無阿弥陀仏の名号に姿を変えて、その名号を凡夫に聞かしめずにはおかないとのご本願をお建て遊ばしたと戴きます（Ref 第十七願、第十八願）。そのことを衆生に知らしめようとまずお釈迦様がお名号の功徳をお讃えになったのです。

お名号とは何か、**帰命尽十方無礙光如来（十字）、南無不可思議光仏（八字）、南無阿弥陀佛（六字）のお名号を親鸞**聖人は併せ用いられました。

「南無阿弥陀仏」の「南無」とは「帰命」の二文字こそは、浄土真宗のみ教えの要（かなめ）、**本願力回向**と**本願招喚の勅命**の根拠となる御文でありました。

「勅命」とは「帰せよ（私の願いを聞き届けておくれ）との如来様のご命令」です。

親鸞聖人は、招喚の「喚」に「**ヨバフ**」とご左訓遊ばしました。これは、如来様が絶えず喚び続けて居て下さるありさまをさします。

お謂われを聞くと「さあ、称えてごらん」と本願力回向してお与え下さったお名号を自らもお称えしたい気持ちになります。その流れがお弟子から七高僧を経て、妙好人、祖父母のお念仏となって現れて下さったのです。

称名は、如来様がお手許で仕上げられた如来様の行（大行）ですから、「南無阿弥陀佛」と称

えれば直ちに私の身の上に大行が働き出され、私達は迷いの世界にありながら、お浄土から届いて下さったお喚び声が聞こえて下さるのです。そのお喚び声に喚び覚まされて私は如来様の真（まこと）のお心を頂戴します。最後の御言葉は、「信心まことと示します」と修めることができます。第一聯の大意です。

六字釈は、お名号のお謂れを如来様のお心の側から説き明かされたお釈ですから、古来、**「法体釈」**又は**「約仏釈」**と称されてきました。

続いて、第二聯に参ります

二、このよび声を聞きひらき
如来の救いにまかすとき
永遠に消えない灯火が
私の心にともります

第二聯は、如来様の勅命を衆生（私）が聞き開く有様を謳われたものであります。

「聞きひらく」というのは、それまで衆生が固く閉ざして来た心の扉（如来様のご本願のお喚び声をはねつけてしまっていた衆生の疑いの扉･疑いの蓋）を開くことを申します。

この心の扉を開いて「如来の救いにおまかせすることが浄土真宗の**信心**を頂戴すること」になります。

如来様のお喚び声に喚び覚まされたその瞬間、私は、苦悩の今生の真っ只中に浄土へと続く白道の東岸に立つことになるのです。

善導大師が『観経疏』で明らかにして下さった**二河白道**（にがびゃくどう）の東岸です。

そのときから、白道上の旅人（私）は、東岸のお釈迦如来の**「往（ゆ）け」**との発遣のお言葉に促され、西岸の阿弥陀如来の**「来たれ」**との招喚のお言葉に喚び覚まされつつ、温（ぬく）もりに包まれた人生を歩むことになるのです。

「南無」とは「帰命」の「帰命」とは、二尊の勅命に「まことにかたじけのうございます」と召し（声）に叶う言葉ですから、衆生から見れば、如来様の仰せに従うことになるのです。

第二聯は、同じ六字釈のお謂れを、今度は受け止める衆生（これを機といい、私を指します）の側から明らかにして下さったものですから、古来これを**「約機釈」**と称してきたのでした（Ref『尊号真像銘文』註釈版初版 P170）。

こうして、これまで如来様の本願のお心からのお喚び声にずっと気付かないで来た私も、今生で懐かしかった方々、とりわけ父母とのお別れに際して、疑いの扉を終に解き放たれるの

であります。

　お喚び声が私の胸にお宿り下さり、永遠に消えない信心のまこと、智慧の灯となってその道行きを照らし続けて下さることになるとき信心を頂戴しているのでありました。合掌

◆仏教壮年会お聴聞の会七月五日(日)二十時より

◆仏教婦人会例会　七月十六日(木) 十九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥